

野良のフィンランド語

北海道教育大学岩見沢校 音楽文化専攻四年 渡邊かなえ
フィンランド、シベリウス音楽院

海外留学、特に語学を目的にしたものにおいて生活の中から生きた言語を学ぶとはよく聞くものです。

私がフィンランドのシベリウス音楽院で一年間学んだ目的は語学ではありませんが、なるほどその通りと思わせられるような経験も多くありました。スーパーで物を買うにも言葉が分からなければ困ります。ヨーグルトと間違えてクリームチーズを買ったり、チョコレートだと思ったお菓子が世にも不思議で複雑な香りを発していたりします。街に出ても標識はフィンランド語とスウェーデン語の併記されたものが多く、一たび道を見失えば迷子の長期化は避けられません。

ですので私が留學生活の初期に覚えたフィンランド語のほとんどは食材や施設の名前がほとんどでした。今になって思うと、フィンランド語の授業を取っておけばよかったという後悔が拭い去れませんが、仕方ありません。後悔先に立たず、そして時間は巻き戻らないのを私は知っています。

私はこれから、授業として体系だった教育を受けずに身に着けたほんの少しのフィンランド語についてまとめます。

先ほど生活の中から言葉を学んだとは書きましたが、それだけでは面白くありません。生活するだけなら長期の旅行でだってできます。リンゴやオレンジ、なんてありふれたものをフィンランド語でどう呼ぶかを並べ立てても退屈なだけでしょ。

そこで、音楽の場から学んだ言葉について触れようと思います。せっかく音楽を学びに行ったのですから、丁度いいはず。

私は一年間、シベリウス音楽院でのレッスンや授業のほかに、学外でのオーケストラにも参加してきました。特に *Ita-Helsingin musiikkiopisto* (*Ita* の *a* の上には点が二つ横並びで付きます) の吹奏楽で行われる、週に一回の練習に参加していました。

この *Ita-Helsingin musiikiopisto* は、フィンランド在住の日本人には東ヘルシンキ音楽学校と呼ばれている施設です。 *yliopisto* が「大学」なので恐らく呼び方はあっています。音楽の学校です。

音楽学校は名前に「学校」と付いているのですがどちらかと言えば音楽教室に近いもので、五歳くらいから高校卒業辺りまでの子供たちが多く通っています。ちなみに、この東ヘルシンキ音楽学校ではそのほかに大人の生徒もいるそうです。

フィンランド各地には多くの音楽学校があって、その地域の初等音楽教育を担っています。音楽学校では様々な楽器を学べます。管楽器に打楽器、ピアノや弦楽器の生徒が在

籍しています。生徒たちは個人レッスンの他に合奏練習に参加できます。

私が参加したのはその合奏のうち、吹奏楽の練習です。そこで先生でもなく生徒でもない、お手伝いとでも呼べそうな立ち位置で一年間を過ごしました。

さて、様々な幸運が重なった結果フィンランドの音楽教育の場に参加するチャンスを得た私ですが、英語もそこそこ分からず、それに来たばかりの時期でフィンランド語はさっぱりわかりません。合奏はフィンランド語と英語で行われていました。英語は、たぶん私のためだろう、と思いました。なんて親切なのでしょうか。私は感謝の念で胸を満たしつつ、指示を聞き取るのでいっぱいになりつつ、最初の合奏を終えました。脳の容量を百二十パーセント使った気分でした。言葉は分からずとも、子供たちが幼いころから楽器に触れている環境は魅力的で仕方ありませんでした。

そのような経緯で、言葉の拙さを無謀にも物ともせず音楽学校の吹奏楽に参加し続けた私は、その恵まれた環境から音楽や言葉を学んでいったようです。気が付けば数字や楽器の名前をはじめとした少しのフィンランド語を身に着けていました。

覚えた単語の中で印象深かったものは **kaikki** という単語で、私が最初に理解した音楽に関するフィンランド語です。

Kaikki は「全て」と言う意味で、合奏の場では全員で演奏する場合に使われているようでした。調べたり、教えてもらったりしていれば簡単にわかってしまう、初歩的な言葉です。しかし、ほとんど事前知識もない状況で混乱から観察、推測を経て得たこの単語を掴み取った瞬間の感動は忘れられません。恐らく日本語を覚える際に同じ喜びを味わったはずですが、成長して思考を言語で行うようになってもおこのように言葉の獲得によって世界を広げる経験を持つことができたのは本当に幸運でした。

一つ理解できる言葉があると、それを手掛かりにして更に学習を進めることができます。

その後は順調に合奏練習の中からフィンランド語を学び、数字や音楽用語のいくつかを聞き取ったり理解したりできるようになりました。聞こえてきたそれぞれの単語を実際の練習の動きや、英語の説明と対応させて覚えていきます。覚えた単語を組み合わせ、短い文章も理解できます。生活の中では、既知の単語と知らない単語の組み合わせを見て新しい単語の意味を推測することもできます。実感を伴ってある単語を自分の物とすることは、単に一つの言葉を覚えただけでなく、その先の知識の獲得への強力な足掛かりとなり得ます。

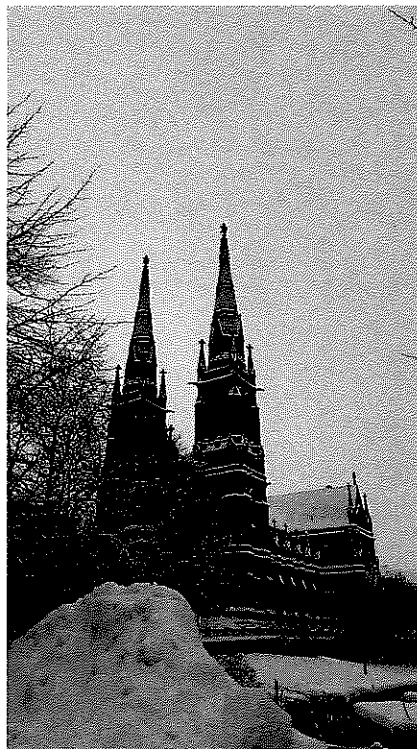
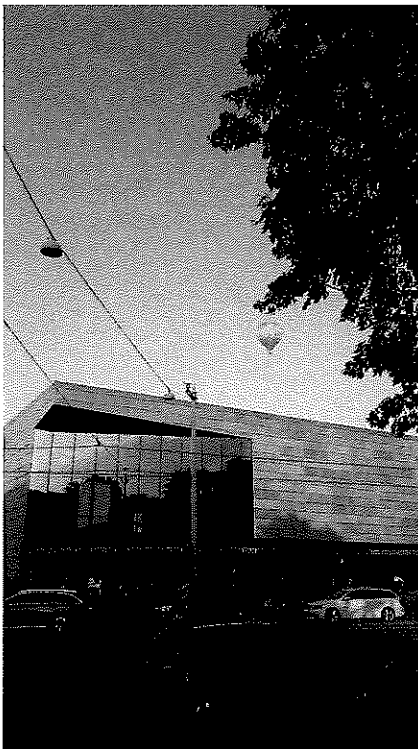
また、合奏という私にとって重要かつ身近な場面において、共に演奏する仲間の母語で理解できる言葉が増えるのは大きな利益です。なぜなら、彼らの口からふと出る言葉は彼らの母語であり、それをそのまま理解できる確率が上がればより頭の中で思い描いたニュアンスに近いものを共有できるからです。そこまで高度ではない会話や指示でも、全員が同じ言語での指示、例えば楽譜上の「練習番号5の12小節前」等を理解できれば時間の無駄が減ります。

それに、親切にしてくれる友人たちと少しでも同じ言葉を共有できるようになると、嬉しいです。日本で暮らしていると、友人と同じ言葉で会話し、お互いが同じ言葉で思考しているのが当たり前になってしまうので気づきませんが、同じ言葉を持つというのは一緒にとる食事と同じくらい嬉しいです。私のフィンランド語がどれほど拙くとも、もっと彼らの言葉を使ってみたくて強く思いました。

私は交換留学生としてフィンランドのシベリウス音楽院で過ごし、音楽的な経験を積むと同時に、言語を実感として学ぶ貴重な体験を持ちました。それは別個に独立したのではなく、お互いに関係しあっています。音楽と言う共通言語が無ければ、私の未熟な英語と引っ込み思案さでは人と分かり合えた実感を得ることはできなかつたと確信しています。音楽知識だけではなく、音楽を少しでも好きだと感じていることが理解への手掛かりでした。

また、言葉の学習は文化の理解へとつながります。人間はその取り巻く文化の中で成長します。そして、文化を理解しようという歩み寄り、相手への尊敬や友好を表すと私は考えます。この留学経験の中で、文化を尊重したり多様性を認めるといった姿勢へのヒントを得られたように思います。

これから留学する皆さんは、是非ともいろいろなことに首を突っ込んでみてください。留学で得られる成果は技術や学力の向上だけではありません。その瞬間にしかできない体験があるはずです。好機を逃さないように、気になったものを見ないフリしないでください。あなただけの得難い経験がまっています。



写真右

シベリウス音楽院 M 棟正面図。
気球が飛んでいます。シベリウス音楽院は三つの棟に分かれていて、M 棟が中心的な役割を担っています。

写真左

東ヘルシンキ音楽学校の演奏会が行われた教会。
名前は失念してしまいました。フィンランドでは多くの演奏会が各地の教会で開催されます。

